

# 世阿弥「離見の見」

また、舞に、「目前心後と云ふことあり。」目を前に見て、心を後に置き」となり。これは、以前申しつる舞智風体の用心なり。見所より見る所の風姿は、わが離見なり。しかれば、わが眼の見る所は我見なり。離見の見にはあらず。離見の見にて見る所は、すなはち見所同心の見なり。その時は、わが姿を見得するなり。わが姿を見得すれば、左右前後を見るなり。しかれども、目前左右までをば見れども、後姿をばいまだ知らぬか。後姿を覚えねば、姿の俗なる所をわきまへず。

なるほどに、離見の見にて、見所同見となりて、不及目の身所まで見智して、五体相應の幽姿をなすべし。これすなはち、心を後に置くにてあらずや。かへすがへす、離見の見をよくよく見得して、眼、まなこを見ぬ所を覚えて、左右前後を分明に案見せよ。さだめて花姿玉得の幽舞に至らんこと、目前の証見なるべし。

担板感に云はく、「そうじて舞・働きに至るまで、左右前後と納むべし。」

(世阿弥『花鏡』)

また、舞に「目前心後」ということがある。「目を前につけ、心を後に置き」という意味である。これは、前に述べた舞智の演じかたにおける心がけである。観客席から見る役者の演技は、客体化された自分の姿である。つまり、自分の意識する自己の姿は、我見であって、けつして離見で見ただ自分ではない。離見という態度で見るときには、観客の意識に同化して自分の芸を見るわけであって、そのとき、はじめて自己の姿というものを完全に見きわめることができる。自分の姿を見きわめることができれば、前後左右、どこだって完全に見るわけである。けれども、自分の眼で自分の姿を見れば、目前と左右とだけは見られるが、後姿はわからない。自己の後姿が感じとれなければ、たとえ姿に洗練を欠く点があっても、よくわからない。

だから、いつも離見の見をもって、観衆と同じ眼で自己の姿をながめ、肉眼では見えない所までも見きわめて、身体ぜんたいの調和した優美な姿を完成しなければならぬ。そして、これは、すなわち、心を自己の後に置くという次第ではないか。どこまでも、離見の見ということをよく理解得し、「眼は眼自身を見ることができない」筋あいを腹に入れて、前後左右を隈なく心眼で捉えるようにせよ。そうすれば、花や玉のように優美な芸の理想境に到達することは、はつきり立証されるであらう。

担板感に「すべて、舞や動作に到るまで、左右前後と破綻のないようにせよ」とある。